

## Car 書簡について

田島俊郎

Lettre de *Car* de Vincent Voiture

Toshiro TAJIMA

### Résumé

En 1637, l'année de la querelle du *Cid*, il y eut une autre dispute sur le mot *car*. Gomberville de l'Académie-Française se vantait de ne point s'être servi de cette conjonction dans son grand roman très populaire à l'époque: *Le Polexandre*. Il prétendait que la langue française pourrait se passer de ce mot «gothique».

A l'Hôtel de Rambouillet aussi, on en discuta. Mlle de Rambouillet demanda l'opinion à Voiture. Il répondit avec cette lettre spirituelle pour la défense de cette conjonction.

Saint-Evremond rédigea une comédie, *Comédie des Académistes*, pour ridiculiser l'Académie-Française et Gomberville. Les manuscrits de cette comédie pleine de satires circulaient sans porter le nom de l'auteur.

A travers ces ouvrages, nous remarquons que l'établissement de l'Académie-Française n'était pas bien accueilli auprès des gens de letters.

### はじめに

田島は先に、1638年から39年にかけてのヴォワチュール (Vincent Voiture) と

シャプラン(Jean Chapelain)の間にかわされた *I suppositi* 論争を見た<sup>1</sup>。この論争は作品そのものへの評価よりも評価する人物に対する批判、メタ論争であり、論点は噛み合っていない。しかもヴォワチュールの *I Suppositi* 評価を検証するのではなく、ヴォワチュールへの嫉妬や、先年のル・シッド論争などでからみ合った文壇の人間関係こそが、1639年冬の論争の主旋律であった。ヴォワチュール自身はル・シッド論争に発言していない。マーニュ (Emile Magne) がヴォワチュールの作と目す断片は残っているが<sup>2</sup>、同時代に印刷されたヴォワチュールの詩や書簡にル・シッドに言及するものは残されていない。シャプランがル・シッド論争の興奮を持続させて組み立てた論点にヴォワチュールが対応した様子はなさそうである。

そんなヴォワチュールも 1637 年には言語意識による意見を述べている。1637 年 9 月頃に書かれた接続詞 *car* に関するもの、*muscardin* の滑稽詩がある。*car* 書簡は名高いもので、例えば Robert 仏語大辞典は *car* の項に「17 世紀に純化主義者 (*puriste*) たちに批判され、ヴォワチュールによって擁護された」との註を付している。なぜ純化主義者たちにとって *car* が批判の対象であり、ヴォワチュールはどのように擁護したのか。言語純化主義 (*purisme*) の装置であったアカデミー・フランセーズとの関わりについて述べる。

### **car 書簡**

まず *car* 書簡の拙訳を載せる。

ランブイエ嬢宛て

拝啓 「だって (*car*)」はわたしたちの国語の中で大いに敬意を払われるべきものですので、このことばに向けてなされようとしている過ちに対しあなたが抱かれた哀れみの情を高く高く買う所であり、こんな乱暴によって創立されようというのを見れば、お話しのアカデミーには大して期待はできません。ヨーロッパのいたる所で運命が悲劇を演じているときに、これほど王国に仕え、王国のどんな騒乱の際にも良きフランス人 (フランス語) の姿を示してきたこのことばが狩りたてられ、訴えられようとしているのを見るときほど、憐愍に値するものは見られません。わたしにとっては、常に理由 (理性 *raison*) の先頭に立って歩き、それを紹介する以外の役割を持たなかった

1 田島 (2003)

2 Magne, p.68.

言い回しに対して、彼らがどんな理由を引き合いに出せるのかわかりません。彼らがどんな利益のために、「だって」に属するものを、「なにゆえなれば (pour ce que )」に与えるために取り上げるのか、なぜ彼らが3字で言えることを3語で言いたがるのか、わたしにはわかりません。もっとも恐るべきことは、このような不正の後にはさらなる不正が企てられるだろうということです。「しかし (mais)」に攻撃をかけてくるのに造作はないでしょう。「もし (si)」だって安全なままでいられるかどうかわかりません。したがってことば同士を結びつけるあらゆることばをわたしたちから取り上げてしまった後、才子の方々はわたしたちを天使のことばに縮小してしまうおつもりなのです。少なくとも彼らはわたしたちが記号だけで話すように余儀なくさせようとするでしょう。確かにあなたのおっしゃったことは正しく、どんな例をもってしても、人間にかかわるものごとの不確かさをこれよりよく知ることとはできない、ということは認めましょう。数年前に、わたしは「だって」より長生きするに違いないと言われれば、わたしに族長たちより長い人生を約束してくれたのだと思ったことでしょう。でも11世紀の間、力に充ち信頼を寄せられ生きた後、最も重要な契約に使用され、わたしたちの王たちの忠告に立派に立ち合った後、それは突然寵愛を失い唐突な終わりに脅かされているのです。もはや空に「偉大なる car は死せり」と叫ぶ哀れな声を聞くのを待つだけです。そして偉大なる「Cam」の死であろうと偉大なる「Pan」の死であろうとこんなに重要で奇妙には思えませんでした。この点に関してわたしたちの世紀の最良の才気の一人であり、わたしが非常に敬愛する人物に相談すれば、彼はこんな新奇なことは断罪しなければならない、わたしたちの父祖の「だって」をその土地や太陽と同じように使わなければならない、シャルルマーニュや聖ルイの口にも昇ったことばを追い立てるべきではないと言うことでしょう。でもそれを保護すべきなのは主にあなたです。なぜならわたしたちの国語のもっとも大きな力ともっとも完璧な美しさは、あなたのことばの中にあるのですし、そこであなたは至上の力をお持ちで、思うがままにことばを生かしあるいは死なせたりなさるに違いないのですから。したがってあなたはこのことばをそれが陥ろうとしていた危機からすでにお救いになった、またあなたのお手紙のなかに封じこめることで、時もねたみも手を出せないアジール、栄光のような中に安置されたのだと思います。こういったことから、あなたの優しさがどれほど奇妙なものか見て驚いたとこと、また百人の男とを容赦なく死ぬままになさるであろうあなたが、1シラブルが死んでいくのを見ておいでになれないと変だと思うということ

告白いたします。もしあなたがわたしに対して「だって」に対してと同じような心遣いをお持ちでしたら、わたしはわたしの不幸にもかかわらずとても幸せだったでしょう。貧困も、追放も苦痛もほとんどわたしに響きえなかったでしょう。たとえあなたがわたしからこれらの不幸をお取り除きになれなかったにしても、その感覚はお取り除きになったことでしょう。わたしがあなたのお手紙から何らかの慰めをいただくことを期待しておりましたときに、その手紙はわたしのためにというよりも「だって」のためなのだということ、その追放はわたしのそれよりもあなたを苦痛に陥れるのだということに気づきました。確かにそれを保護されるのは正しいことです。でもあなたはそのことばに対してと同じくらいわたしを気遣ってくださるべきでした、一語のために友人を見捨ててしまったと非難されないために。あなたはわたしを書いたことについては何もお答えにならず、わたしについては何もおっしゃいません。3、4枚の間に辛うじて1度だけわたしのことを思い出されたのに、その理由は「だって」なのです。今度はもっとわたしをご考慮くださいますように。また苦しんでいる者の保護を試みられるときには、わたしもそのうちの一人だと思ひ出してくださいますように。あなたがこのご寵愛をわたしにもわけてくださるようこのことば自体をいつも使うようにしましょう。またあなたはご寵愛をくださるべきなのです、「だって」わたしはあなたの、云々。(Ubicini, I, p.293-296.)

語句の説明を若干。

「ヨーロッパのいたる所で運命が悲劇を演じている」というまでもなく三十年戦争。デカルトが「一冬炉部屋に籠った」頃に始まった戦争は、『方法序説』出版のこの1637年にもまだ終わってはいない。

「わたしたちの王たちの忠告に立派に立ち合った」。Furetièreによれば、尚書局(chancellerie)から発せられる書類は"Car tel est notre plaisir."という文言で終わるのが常であったと言う。

Panについては、Ubiciniはこのことばはスエトニウスが伝えていると註をつけている。Panの死についてはプルタルコス(Plutarque)が伝える所(Sur la disposition des Oracles, 419.D)によると、ティベリウス帝の時代、Thamusという船のかじ取りが、Paxoi島の近くで「偉大なるパンは死せり」という声を聞いたという。初期のキリスト教会史を書いたカエサリウスのエウセビウスはこれを古代の異教の死の宣告と解釈した。

「世紀の最良の才気の一人であり、わたしが非常に敬愛する人物」というの

はバルザック (Guez de Balzac)。Ubicini は 1637 年 10 月 28 日付のバルザック書簡に言及する。この書簡については後ほど見る。

ヴォワチュールの「不幸」、「追放」、「苦痛」とは、手紙の相手ジュリー・ダンジェンヌから離れていること。ヴォワチュールの主人である王弟殿下ガストン・ドルレアンは、モンモランシーの乱への加担の罰を免ぜられ、この時期ブロワに蟄居しており、ヴォワチュールはそれに従ってパリを離れていた。

この書簡のきっかけはゴンベルヴィル (Marin le Roy de Gomberville) の *Le Polexandre* という長大な作品である。*Le Polexandre* は当時大成功を収めた。タルマン・デ・レオ (Talleyrand des Réaux) の証言によると、「ゴンベルヴィルは小説全体を通じて car の語を使っていない、だからこの語無しでもやっていけるのだと主張していた。わたし (タルマン・デ・レオ) が思うに、こんなことからアカデミー、ゴンベルヴィルもその一員だった訳だが、が car を断罪しようとしているというわさが立ったのだろう」 (Talleyrand des Réaux, II, p.467.)。ランブイエ邸でも話題になり、ランブイエ嬢がヴォワチュールに意見を求めた。

もっとも car を使っていないという主張は、タルマン・デ・レオによると「当時バスティーユにいた Bassompierre 元帥付きの小姓の一人が、それが本当か確かめてみようという気になり、5 巻を読み通し、car がいろんなところで使われていることを確認した」 (loc. cit.) とのことである。アカデミー・フランセーズの初期の歴史を書いたペリッソン (Paul Pellisson) によると 3 箇所使われている (Pellisson, p.52)。

ゴンベルヴィルは car をゴート語起原だとして嫌ったようである。メナージュ (Gilles Ménage) は、*Requete des Dictionnaires* の中でこう書いている。「でも町中では知られております、その後あなたのゴンベルヴィルが不当にもその作品の中で哀れな car を古すぎてゴート語とかかわりがあると禁止しただろうと」 (Talleyrand des Réaux, II, p.1303, note 7. Pellisson, p.479.)

car はゴート語起原ではない。Furetière はギリシア語の gar に語源を求め、同時にメナージュがラテン語の quare を語源として提案していることも伝えている。これはメナージュが正しく、qua re (関係代名詞 qui の女性奪格と res の奪格) が語源らしい。quare は pourquoi, c'est pourquoi の意で古典ラテン語でも使われていた。古フランス語では quar, quer の形で使われている。現在では等位接続詞としてのみ使われる car を、従属接続詞として使う例があった。12 世紀頃にはことに pour ce car という形が pour ce que の同意語として許容されていた。14 世紀には parce que に追われて使われなくなる。car を que の代わりに使う表現は中世

フランス語では許容されていたようで、Greimas は、L'Une raison est quar pour ces soudees nous aurons melleurs hommes d'armes et de mer...(1295)の例を引いている。また Littré は 14 世紀の例として A plusieurs gens sont aucunes choses delectables qui sont contraires l'une a l'autre, et la cuase est car [que] telles choses ne sont pas naturellement delectables (Oresme, Eth, 19.) Et la cause pour quoy nous ne conseillons pas des choses dessus dites est car [que] nule de celles n'est faite par nous.(*ibid.*, 66.)の 2 例を挙げている。

そもそもはこの従属接続詞としての *car* のみが問題であった。しかも *car* 断罪の発案者はゴンベルヴィルではなく、*car* を排除したのはマレルブ (François de Malherbe) であるという。1637 年にはマレルブはすでに亡いのだが、その影響力は大きい。マレルブは、*la cause est car...*, *la raison en est car...* という表現の中の、接続詞 *que* に代わって用いられていた *car* を断罪した<sup>3</sup>。

たかが単語一つを断罪するかどうかがなぜ議論になるのか。もちろんことは単語一つのことではないから問題なのである。

17 世紀のフランス文学史がマレルブで始まるのは、マレルブが世紀の初頭に活躍したからだけではない。マレルブが詩とフランス語を革新したからこそ、Enfin Malherbe vint. (Boileau, *L'Art Poétique*, chant 1, v.131.)と唱われる。マレルブにとって詩は論理的で明晰でなければならない。そのためにはことばが明晰でなければならない。明晰なことばのためには、一語は一つの観念を表現すべきであり、一語につき意味は一つであるべきである。マレルブは言語を単純化し、統合し、意味を一つに確定し、必要な単語だけを確定し、複数の動詞変化は一つにし、フランス語に簡潔さを与えた<sup>4</sup>。

こういった言語状況の中で *car* は槍玉に挙げられる。Wartburg が、この時期の言語状況をまとめた中で *car* に言及している。「16 世紀において因果関係を表す接続詞の豊かさを見た。17 世紀はそれを *parce que*, *puisque*, *car* の 3 つにまで縮小し、これら 3 つの接続詞の役割ははっきりと区別された。さらに進んで *car* を消しさろうとさえし、これは例の論争を引き起こすことになった。この論争は、他の時代だったら偶然に任せてほったらかしていたであろうような小さな問題をこの時代にはどれほど真面目に論議したかを示してくれる。Vaugelas はある貴族が *la raison en est car* で文をはじめその続きを言うことができたことを伝えている。そしてこの小さく不完全な文は格言的な揶揄の表現となった。つまり不完全な論を組み立てる論者をからかう時に: *la raison en est car* と言ったのである。

3 Robert, Dictionnaire historique de la langue française の *car* の項。

4 Adam, I, p.30-32。

こういった訳でマレルブは car をころよく思わなかった。この語をきっぱりと閉め出した。ヴォワチュールがランブイエ夫人への機知に富んだ手紙でそれに介入した。ヴォワチュールは car を擁護し、文法家に勝利した。car は生き残った、なにより不可欠であったからである。フランス語が持っている唯一の理由を表す等位接続詞だからである。」(Wartburg p.178-179.)ただし、書簡の相手を母のランブイエ侯爵夫人とするのは娘のランブイエ嬢の間違いである。

### 反響

シャプランはこの書簡のコピーをバルザックに送り、バルザックは1637年10月28日付の書簡でヴォワチュールの機知を認める。「われらが友人の car について言いますと非常に立派なものだと存じます。彼はからかいに関しては才能を持っていると認めない訳には参りません。ただもう少し文体を洗練させるよう努力すればと望むところです。彼の書いたものでは時に構造が混みいっておりますし、ものもことばも常に最適な場所に置かれているとは限りません。折句のソネについていえば、かつて car の著者の家であったことのある、「いにしえのヴォワチュールの幸せな祖霊に」というかの有名な墓碑銘を書いた\*\*\*という名の大学の狂人風でなければ間違っていました。」(Balzac, I, p.756.)

それに対して10月10日付<sup>5</sup>の書簡でシャプランはこれに答え、バルザックの言及する折句はヴォワチュールの作ではないと明かす。「car の著者に対するあなたの判断はとても公正なものであり、あなたが同氏をほめられた点に関して大分前に氏に賛辞を送っております。「折句」の方は宮廷を走り回っている Du Lot という名の狂人の手になるものですが、体言している狂気の表現においては上手にやっております、言われるようになりわいとしている者以外、もっと上手にやりのける常人は知りません。あなたには不愉快ではないだろうと考えますある件に関連してお楽しみいただけるよう送りました。」(Chapelain, p.169.)バルザックの語り口は好意的ではないかも知れないが、car 書簡への評価そのものは好意的に評価していると言って良いだろう。ちなみにこの折句はタルマン・デ・レオが引用している。ルーアン大司教であった François de Harlai の名が折り込んであった。バルザックは1631年にこの人物と論争しており、バルザックにとって不愉快ではなく、楽しめる件というのはその論争を指すのだろう。

---

5 もちろんどちらかの日付が間違っているわけで、シャプランの編者 Tamisay de Larroque は、Balzac 書簡の日付を9月28日の間違いと推測する。Chapelain, p.170. note.

後に『老いぼれ』(*Le Barbon*) の名で出版される作品の中でからかわれるのは実はこの Harlay なのだ、とタルマン・デ・レオは伝えている<sup>6</sup>。

その後シャプランは car 書簡のより正確なコピーを手に入れたようで、11 月 4 日付の書簡でバルザックに送っている。「car 書簡のもっと正確なコピーを再送します。もっとも先便にも小さな間違い二つしかありませんし、あなたが送られたコピーには著者が確かにマークした位置に×印があったのではありませんが。」(Chapelain, p.174.)

### 政治の道具としての文芸

言語は優れて政治的な問題である。言語の純化が単に詩人や文学者の表現の問題にとどまるはずはない。文芸は政治や道德の隠喩として機能するのだから、論争は熱を帯びることになる。言語の純化という主張がマレルブとその弟子たちを起原とするにせよ、それを政治的な道具として採用したのはリシュリユーである。リシュリユーは文芸家の私的な集まりを保護し、アカデミー・フランセーズとする。

ペリッソンによると、1629 年頃、コンラール (Valentin Conrart)、シャプラン、ゴドー (Antoine Godeau)、ゴンボー (Jean Ogier de Gombauld)、ジリー (Louis Giry)、アベール (Philippe Habert)、セリジー (Abbe de Serisy, Germain Habert)、マルヴィル (Clalude de Malleville)、セリゼー (Jacques de Sérisy) の 9 名により私的な集まりが形成される。かれらは政治的な党派的な動機で集まっていたわけではなかった。ただかれらはマレルブの影響を受けており、「純化主義者」であった。集まりについて口外しないことを申し合わせていたのだが、マルヴィルがファレ (Nicolas Faret) に集まりについて話し、ついでファレがリシュリユーの寵臣であったボワロベール (François de Boisrobert) に繰り返し、リシュリユーの知る所となる。リシュリユーはこの会合の保護する提案をボワロベールに託す。提案には反対もあったようだが、シャプランは枢機卿の保護を受け入れる以外に選択肢はないのだということを仲間たちに言い聞かせる。1934 年の年初のことであった。同時にこの集まりは有力な人物を迎え入れた、セギエ (Pierre Séguier)、ボワロベールとデマレ (Jean Desmarests) の三人、国務評定官と国璽尚書といった高官である。1634 年 3 月 16 日以来記録が取られる。

リシュリユーに保護されたアカデミーは専制の装置になるだろうと考えられた。高等法院は開封勅書 (開封勅書 *Lettre patente* とは王から出す勅令の一種で、

6 Tallemant des Réaux, II. p.41.



特定の個人集団にのみ適用される特権を公認する文書で、国璽尚書が署名し、高等法院が裁可しなければならなかった）を裁可することを可能な限り遅らせた。開封勅書は1635年1月25日に署名されているのに、1637年7月9日まで裁可されなかった。さらに裁可の決定は以下の一文を含んでいた。「アカデミーはフランス語について、さらに自らが出版した書籍、及びその判断に関して述べられた書籍に関してのみ裁判権を有する」高等法院は専制を恐れていた。文人は揶揄するか警戒していた。高等法院による開封勅書の裁可が遅らせられたのは、アカデミーが専制の道具になることを警戒したからである<sup>7</sup>。

### Comédie des Académistes

ヴォワチュールは言う「お話しのアカデミーには、こんな乱暴によって創立されようというのを見れば、大して期待はできません」(Voiture, *loc. cit.*)。否定的な見方をしていたのはヴォワチュールだけではない。過激に敵対する論は、国外からあるいは匿名の手稿で流通していた。ペリッソンが言及するものとしては、マリー・ド・メディシスに従ってブリュッセルにいたサン・ジェルマン (Mathieu de Morgues, abbé de Saint-Germain) の誹謗文書、メナージュの『辞書に関する上申書』(Requête présentée par les dictionnaires)、『フランスの雄弁の白日のもとへの提示目録』(Rôle des présentations faites aux grands jours de l'Eloquence françoise)そして、ヴォワチュールと同様にゴンベルヴィルに触発されて書かれた『アカデミー会員の喜劇』(Comédies des Académistes)がある。『上申書』以下はいずれも匿名で印刷されたが、ペリッソンは作者名を同定している。『上申書』はメナージュの作、『目録』の作者はソレル (Charles Soré) だと聞いた、とペリッソンは言う。サン・ジェルマンのブリュッセル発の誹謗文書の標的はアカデミーよりもリシュリューであった。サン・ジェルマンはアカデミーを「Psaphonの鳥小屋」と呼んでからかっている。Psaphonは神と認められたくて鳥を集め、「Psaphonは神だ」ということばを教え込んだという<sup>8</sup>。

ヴォワチュールの car 書簡は特におとがめもないのだが、『アカデミー会員の喜劇』はとがめを警戒して匿名で手書きのコピーでのみ流通していた。シャプランが1638年の4月28日付の書簡(Chapelain, I, p.230.)で、手書きコピーが出回っていたことに言及している。手書きコピーで流通し、題名も不確か、著者名も不祥だったのは、この作品が毒を含んだ風刺だったからである。作品の中で

7 Pellisson, p.7-41. Adam, I, p.220 et sqq.

8 Tallemant des Réaux, I, p.271. note par Adam, p.943.

からかわれるシャプランは、バルザック宛の 1638 年 6 月 20 日付の書簡で、この作者はバステューユ送りになる、と言っている<sup>9</sup>。また、1639 年 8 月 23 日付の Bouchard あての書簡では、著者をサン・タマン (Antoine Girard Saint-Amant) と推測し、その説をグルネー (Marie Le Jars de Gournay) が 100 パーセント支持していると伝えている<sup>10</sup>。1650 年に印刷されたが、間違いが多く、匿名のままであった。サン・テヴルモン (Charles de Saint-Evremond) の名がはじめて言及されるのは 1653 年、ペリッソンによる<sup>11</sup>。タルマン・デ・レオもそれを承けてサン・テヴルモンをこの作品の著者としてしている<sup>12</sup>。

Jacques Truchet によれば、この劇の趣旨を理解するためには当時のアカデミーの置かれていた状況を考慮に入れなければならず、攻撃には 3 つの論点があったとする。すなわち、フランス語改革、ル・シッド論争、政治的な論争である。ル・シッドへの言及は全くないのだが、Truchet は、サン・テヴルモンはコルネイユとは親しかった、と言う。アカデミーがリシュリュの専制の道具と目されていたことはすでにのべた通りで、アカデミーに反対することはリシュリュに反対することでもあった<sup>13</sup>。この劇の主題は言語政策への警戒である。この劇で攻撃されたのはすべてのアカデミー会員ではない。コンラール、ヴォージュラ、ヴォワチュールは登場しない。言及されるか登場するのは 16 人だけ、しかもそのうち、サン・タマン、ファレ は好意的に描かれる。ことばの純化政策風刺が主題である以上、car 擁護を書くヴォワチュールが登場しないのは当然か。

あらすじを述べる。

最初に「フランス語を改革することに首を突っ込むアカデミーの作者たちに捧ぐ、ただしゴンベルヴィルは除く (Dédicace, aux auteurs de l'académie qui se mêlent de reformer la langue française, excepté Gomberville)」という奇妙な献辞がある。ゴンベルヴィルは故意に除外されているが、これはゴンベルヴィルを批判から免除したのではなく、むしろゴンベルヴィルこそが標的であることを暗示している。またゴンベルヴィルは作品中では Ladreville という名前で登場する<sup>14</sup>。

---

9 Chapelain, I, p.257-258.

10 Chapelain, I, p.486. note 3.

11 Pellisson, p.49.

12 Tallemant des Réaux, I, p.415.

13 *Théâtre du XVII<sup>e</sup> siècle*, p.1383-1385.

14 Roosebroeck と Carile の説。Truchet, p.1387.

「作品に題材を提供していただいたのだからこの作品を捧げるのは当然である」と書き起こし、「アカデミー以外の作者たちは当然の評価には値するのだが、あなた方と比べてみるとかれらの知性には弱い所もあって、あなた方ほど正しく判定する能力を備えていらっしゃる方はいない」とほめあげる。しかし最後には「これ以上奥歯にもののはさまったような言い方をしないようにいたしますと、わたしはあなた方の愚行と卑怯さの最大の敵であります」と宣戦布告する。

#### 1 幕 1 場

トリスタン・レルミット (François Tristan l'Hérnite) とサン・タマンが、アカデミー会員たちの詩人として資質に疑問を投げかけながら、シャプラン、ゴドー、ボードワン (Jean Baudoin), コルテ (Guillaume Colletet), レトワール (Claude de Lestaille), Ladreville, ボワロベール, ゴンボー, アベールの名前を挙げていく。このうち Ladreville だけは架空の名前で、献辞について述べたようにゴンベルヴィルを指すのであろうとのこと。

#### 1 幕 2 場

ゴドーがアカデミー会員を待つ所へ コルテが到着し、最近 Grasse の司教に任ぜられたゴドーに対してひざまずく。コルテの大袈裟な謙譲にゴドーは旧来の対等な関係をと立ち上がらせる。さらに自作についての意見を求め、自画自賛する。次にコルテの作品を評する段になるとゴドーの評価は冷たく、しだいに口論になり、ゴドーは高圧的になっていく。

#### 2 幕 1 場

シャプランがひとり伯爵夫人頌の推敲の場面である。

#### 2 幕 2 場

そこへ ゴンボー, アベール, レトワールが到着しシャプランに、ソレルや Du Bosc が反アカデミーの文書を書いたと述べる。それに反論するだけの才能をもった人物が仲間にはいないので、サン・タマンに頼んではどうかとレトワールが提案するが、むしろ反アカデミーだとアベールがとどめる。他に有能な人物としてバルザックや Racan の名をあげるがいずれもむしろアカデミーを不快に思っているのでは頼めそうにない。最後にシャプランがアカデミーは強力な保護者をもっていると述べる。Jacques du Bosc はコルドリエ修道士でファレの *L'Honnête homme ou l'art de plaire à la Cour* に倣って *De l'honnête femmes* という作品を書いている。

#### 2 幕 3 場

戦争の音にも震え上がるという文芸志願のブレヴァル侯爵 (Marquis de Breval) の独白。タルマン・デ・レオが伝える所によると、この人物はタキトゥスを訳

したのだが、印刷屋を見つけるのに苦勞した挙げ句、本は全く売れなかったと言う。シャプランが car 書簡と一緒にバルザックに送った折句に名を折り込まれた François de Harlay の兄弟である<sup>15</sup>。アカデミーには所属したことはなかった。ペリッソンは、アカデミーに全く縁がないブレヴァルに役柄を与えられていることに当惑を表明している<sup>16</sup>。

### 3 幕 1 場

無知を称揚するシロン (Jean de Silhon) に皮肉を投げかけたボワロベールの口論。セリゼー<sup>17</sup>が仲裁に入り、口論のきっかけは接続詞 or にあることがわかる。シロンはこのことばが神学の ergo に対応する重要なことばだとするのに対し、ボワロベールはそれは甘さも飾り気もないと反論する。そこへ巫女(sibylle)と呼ばれたグルネー老嬢が到着する。

### 3 幕 2 場

セリゼー、ボワロベール、シロンに加えてグルネーが登場。グルネーはモンテーニュの『エッセー』の熱烈な読者で、信奉者であった。ボワロベールがグルネーをリシュリューに紹介した折に、この人物の召し使いや飼っていた猫にまで年金をつけるようにすすめた、とタルマン・デ・レオは伝えている<sup>18</sup>。それほどボワロベールとは親しかったようなのだが、この場ではボワロベールも、慣用からはずれた古い表現を使い、マレルブ以前のプレイアッド派の伝統を体現するグルネーを狂人扱いする。

### 4 幕 1 場

ボードワンが、言語改革が一段落して休息できると独り言を言う所で、執達吏に首根っこを捕まえられシャトレ (監獄) に入れられる。見のがすには賄賂を要求されるが 30sols しか持ち合わせがない、それでも執達吏は納得するが、典獄は何かおいていけと迫る。

### 4 幕 2 場

食卓でのワイン礼讃の詩のやり取り。サン・タマンが歌い、得意でないとするファレに語らせ、トリスタンが締める。

### 5 幕 1 場

---

15 Tallemant des Réaux, II, p.39.

16 Pellisson, p.49.

17 Truchet は Cherisy の綴りを採っているが、アカデミーの最初の院長である Jacques de Sérisy。文芸作品は残していない。

18 Tallemant des Réaux, I, p.379-380.

フランスに雄弁をもたらすのだとのセギエのことばに、ゴドーがセギエがいなければ女神は降臨しなかつただろうと持ち上げる。シャプラン、ボワロベール、レトワール、ボードワン、コルテ、ゴンボー、アベールが順にセギエを持ち上げて行くうちに、セギエは、トリスタン、ファレ、サン・タマンの不在に気付く。自分が国事に専念しているのに、彼らは呑むことに専念していると、セギエが呆れる。

#### 5 幕 2 場

シロンとブレヴァルを加えてフランス語の改革についての意見の交換。それぞれが追放すべき単語を挙げて行く。ゴドーが *or, d'autant* を槍玉にあげると、シロンがこれらの語は結論をつけるために必要だと反論。議論が過熱する。

続いてシャプランが *fermer la porte* は理にあわない、*pousser la porte et fermer la chambre* と言おうと提案する。これに対しアベールは慣用が認めているものを唐突に廃棄するのは利口ではなかろうと反論。

ボワロベールは *à ravir* を廃棄することを提案。レトワールは *jadis* と *auparavant* を切ることを提案。ボードワンは *effectif* を断罪し、*actif* の代わりに *agissant* を使うことを提案する。これらは受け入れられる。

コルテは *néanmoins* を廃棄してそれに代わる語を作ろうと提案。アベールは古いものには相応の敬意を払うべきだと。コルテはグルネーが使うような *ainsi soit, pieça* (=il y a longtemps), *blandices* (*cajoleries, flatteries pour tromper quelqu'un*) (といった当時すでに古い) 表現も残せば良かろうと重ねると、アベールは、それは古いからと断罪するのではなくほかに良い言い方があるからだ、と応じる。

ブレヴァルは Du Vair の作品の中に *empirance* を見つけたが、*décadance* であるべきだとの意見を述べる。

最後に「アカデミーの決定」をセリゼーが述べて劇は終わる。

「神のご加護で神々しい集まりは

ことばを規則付けることに成功した。

かつて野蛮なゴート族からもたらされた

古くて粗野なことばを断ち切った。

われらはそれらを除き、全力をもって

もの書きたちに正しい禁止をくだした。

それは堅固な定めとなるに違いなし。

すなわちこれより、決して *car* も *pourquoi* も使ってはならぬ。

*parce que* も *parfois* ももはや流行りではない。

*Combien que* もよろしくなく、*or* はあまりに不適切。

Jadis はもう使うには古すぎる。  
 われらは d'autant を à ravir 同様追放す。  
 たとえ慣用が強かろうと、  
 これより pousse la porte と言わねばならぬ。  
 容赦なく邪魔な effectif は壊し、  
 actif のかわりに agissant を使おう。  
 われらは néansmoins は容赦しよう。empirance には  
 décadance が代わらねばならぬと誰も知らぬは無し。  
 これがほぼわれらが改革したいこと  
 これを非難したい者は自由思想家と呼ばれよう。  
 アカデミーの集まりを認めぬものは  
 われらには、異端よりたちが悪いと見なされよう<sup>19</sup>。

---

19 原文は以下の通り。

Grâce à Dieu, compagnon, la divine assemblée  
 A si bien réussi que la langue est réglée.  
 Nous avons retranché les vieux et rudes mots  
 Introduit autrefois par les barbares Goths;  
 Nous les avons ôtés et de pleine puissance  
 Faisons aux écrivains une juste défense,  
 Qui devra leur servir d'une très forte loi.  
 Qu'ils n'usent donc jamais de car ni de pourquoi;  
 Parce que ni parfois ne sont plus à la mode;  
 Combien que n'est pas bon; or est trop incommode;  
 Jadis semble trop vieux pour s'en vouloir servir:  
 Nous bannissons d'autant, aussi bien qu'à ravir,  
 Et, quoique la coutume en ceci soit bien forte,  
 L'on dira désormais que l'on pousse la porte;  
 Nous cassons sans appel l'importun effectif,  
 Et mettons agissant en la place d'actif;  
 Nous souffrons néanmoins; pour le mot d'empirance,  
 Personne n'ignorait qu'il fallut décadence.  
 Voici ce qu'à peu près nous voulons réformer;  
 Soit nomme libertin qui le voudra blâmer;

1 幕 2 場のゴドーとコルテの掛け合い、4 幕 1 場のブードワンと執達吏たちのドタバタ、5 幕 2 場の祝祭的なフィナーレなどはモリエールの笑劇を思わせる。実際、モリエールが『女学者』の中で借用している<sup>20</sup>。

当時のアカデミー会員全員が等しく揶揄される訳ではない。ヴォワチュールも名目上はアカデミーの一員だったが名もあげられない。バルザックもアカデミーには批判的と認識されている。ところがアカデミーの一員ではなかったブレヴァル、グルネーがからかわれている。サン・タマンやトリスタンは比較的好意的な取扱いを受けているのが、シャブランやグルネーがサン・タマンをこの劇の作者と推測した一因だろう。

car 自体は言及されるが、断罪する理由は述べられない。反対者は自由思想家であり異端であるとする幕切れの 3 行は滑稽さの中に潜む無気味さを示している。アカデミーを専制の道具と見るのはこの劇の作者だけではなかったことは間違いない。

*Comédie des Académistes* は後年サン・テヴルモンによって改訂され、改訂版では car が話題になる。

問題の箇所を拙訳を示す。

「ゴンベルヴィル: おのおのがた、car と pourquoi はいかがいたしましょう。

デマレ: car 無しでは王の権威はいかがなりもうそうぞ。

ゴンベルヴィル: 王は、どうなっても王としてあるべきものであられましょう、それにわれらが主人であられるのはことばのおかげではありません。

ゴンボー: 臣民に規則と義務を定めるために car が至高の権力にあるというのはご立派な身分ですな？

デマレ: ゴンボー殿、お見受けするところ貴殿は異端者じゃ、共和制の隠れ支持者じゃ。

ゴンボー: わたしは善良な臣であり、いつまでもそうでありましょう、そのようなおことばの後には car の為に死ぬ覚悟。

デマレ: car に続いて法律は発せられるのですから、car 無しでは秩序もなく混

---

Qui ne reconnaîtra la troupe académique

Soit estimé chez nous pire qu'un hérétique. (Théâtre du XVII<sup>e</sup> siècle, p.539-530.)

20 Truchet による。Théâtre du XVII<sup>e</sup> siècle, p.1385.

乱と放埒ばかりとなりましょう。」<sup>21</sup>

この改訂は 50 年以上たってから改訂であり、car が生き残ったことは知っている。たとえば、ラ・ブリュイエールは『ひとさまざま』の「慣例」の項でヴォワチュールの書簡に呼応して述べる。「car はいかほどの迫害を被ったことか。もし洗練された人々の間に保護を見つけられなかったならば、この語はこれほど永く仕えた言語から、代わるべきことばもないまま恥ずべくも追放されたことであろう。」<sup>22</sup>

### Muscardin

Car 書簡より少し遅れて、1637 年から 38 年初めには muscadin (麝香入りキャンディ) 論争が起こる。moscardino というイタリア語起原のこの単語を、muscade との類推から r を除いた発音が派生したのだが、r を残すべきかどうかについての論争である。ペリッソンによればこの論争はランブイエ邸で始まった。ヴォワチュールは muscardin をからかう滑稽詩を書いている。

いにしえのきりし (騎士) の世紀、

21 原文は以下の通り。

Gomberville: Que ferons-nous, messieurs, de car et de pourquoi?

Desmarets: Que deviendrait sans car l'autorité du roi?

Gomberville: Le roi sera toujours ce que le roi doit être,

Et ce n'est pas un mot qui le rend notre maître.

Gombaude: Beau titre que le car au suprême pouvoir,

Pour prescrire aux sujets la règle et le devoir.

Desmarets: Je vous connais, Gombault, vous êtes hérétique,

Et partisan secret de toute république.

Gombault: Je suis fort bon sujet et le serai toujours,

Près de mourir pour car après un tel discours

Desmarets: De car viennent les lois, sans car point d'ordonnance,

Et ce ne serait plus que désordre et licence,

(La comédie des Académiciens, III, 3. 改訂版。Littre が car の項で引用。)

22 Quelle persécution le car n'a-t-il pas essuyée! et s'il n'eût trouvé de la protection parmi les gens polis n'était-il pas banni honteusement d'une langue à qui il a rendu de si longs services, sans qu'on sût quel mot lui substituer? (La Bruyère, p.432.)



よろき（陽気）ならざる者たちは  
 おろみや（大宮）人であれいい（市位）の者であれ  
 おるがた（奥方）であれまりおんな（町女）であれ  
 いつもミユスカルダンと言い、  
 バレレリーナと呼んだもの。  
 その頃は赤い薔薇（rose muscade）ミユスカードを  
 ミユスカルドと呼んだとか。  
 それならこっちもその上を行き、  
 わたしはビヨロキ（病気）で、  
 ほら今度は  
 おらゆ（お粥）を持ってきてくれた」<sup>23</sup>

シャプランは1637年12月29日付の書簡でバルザックの意見を尋ねている。  
 「あなたは muscardin とおっしゃるか muscadin とおっしゃるかおしらせ願えま  
 せんでしょうか。あなたによって解決される事しか期待しないような文法的問  
 題です。この問題は幾許かわたしにとっては重要な問題です。」(Chapelain, p.189.)  
 それに対して11月17日付書簡<sup>24</sup>で、バルザックは「耳は muscadin が好みまし

---

23 原文は以下の通り、

Au siecle des vieux palardins,  
 Tous ceux qui n'estaient pas bardins,  
 Soit courtsants, soit citardins,  
 Femmes de Cour, ou Citardines  
 Prononçoient toujours Muscardins,  
 Et Balardins et Balardines.  
 Mesme l'on dit qu'en ce temps la  
 Chacun disoit rose muscarde;  
 J'en dirois bien plus que cela,  
 Mais, par ma foy, je suis malarde,  
 Et mesme, en ce moment, voila  
 Que l'on m'apporte une panarde.

(Lafay, II, p.281., Ubicini, p.430., Pellisson, p.119. ただし Ubicini, Pellisson にはいずれ  
 も7行目と11行目が欠けている。)

24 もちろん日付には問題がある。この書簡は1637年12月29日シャプラン書

ようが、慣例は muscardin です。しかしここでも他でもそうであるように慣例に従うべきです。またこの語の起原はイタリア語なのですから、われわれには、管轄外にある語から一文字取り除くどんな権利がありましょう。この文字(r)が粗野であり、犬のような (canin) 文字だと呼ばれていたとしても、Muscardins の中で\*\*\*氏の小さな口においたをしたにしても、この文字はアルファベットの 中で相変わらずその地位に固執することをやめないのです。つまりこの文字は何世紀も前からぶつぶつ言ったり (murmurer)、怒ったり (gronder)、噛みついて (mordre) 報いを受けなかったりし、muscardin より粗野でもごつごつしていなくもない語に入り込んでいてそれで誰も不満は申し立てていないのですから。」

(Balzac, I, p.757.) この\*\*\*氏は多分ヴォワチュールだろうから、バルザックはここでもちくりと皮肉を効かせている訳だ。

ペリッソンがアカデミーの 1638 年 2 月 1 日の記録を参照して述べるところによると、アカデミーは muscadin を好ましいと判断したようである<sup>25</sup>。この他愛のないエピソードをペリッソンがアカデミーの歴史の中に挿入したのは、ヴォワチュールのこの印刷されなかった滑稽詩の由来を説明するためにだと言っている。この戯れ歌も手書きコピーで流通していたのだろう。

r に関連する似たような現象についてのコメントが Vaugelas にある。Fronde はラテン語の funda から来ており r を含まないのだが、fonde ではなく fronde と呼ぶべきだ、慣例はそうだし、皆がそう発音するのだから、マレルブ氏は常にそう書いていた、と述べている (Vaugelas, p.53.)。muscardin では、r 付きではヴォワチュールの口には発音しにくかろう、語源にある r を除く訳には行かない、と皮肉をこめてバルザックは述べていた。ところが、fronde では語源にない r が慣用を理由に認めるべきだとヴォージュラは述べる。もちろんヴォージュラは観察者、バルザックは理論家と、論者の資質は異なる。さらに異なることばに異なる対応があるのは当然だろう。r は折に触れて飲み込まれたり付け加えられたりしていたものらしい。ことばを規制することの難しさを思わせる例ではないか。

## まとめ

---

簡に対応して書かれたものだろうから、実際は多分 38 年 1 月に書かれたのであろう。Chapelain, p.189. note

25 Pellisson, p.118-119.

以上、アカデミー創立の時期の言語純化の様子を、反対者ヴォワチュールの揶揄を中心に見た。car はあらゆる用法が断罪された訳ではなく、従属接続詞 que の代用としての、当時すでに古いとされた用例が断罪されただけであったようである。ペリッソンは「アカデミーにはそんな考えは全くないのに、car を追放しようとしている、と人々は結論した」(Pellisson, p.52.)と car 追放が誤解によると述べているし、ヴォージュラも「生活に火や水が必要であるのに劣らぬ位必要なこの語を狙いうるとは」(Brunot, p.410.)と驚いてみせる。ヴォワチュールは用法を分けずに car を擁護した。この無頓着はまさに無頓着な反対であったのか、裏に言語による専制を警戒する政治的な意図があったか。ヴォワチュールについては、表面はあくまで滑稽をまとっているのだが、時代の文脈に置くと無垢でもなかったかも知れない。

単語や言い回しが生きながらえるかどうかは、いかに強力な個人であってもコントロールしきれるものではない。Enfin Malherbe vint と歌われるように、われわれが知っているフランス語は「純化」されたフランス語である。ヴォワチュールをなど純化主義の「専制」に反対した者たちは敗れたのか。しかし car はもちろん生き残った。

ヴォージュラはマレルブの語法に依拠し、判断の基準として bons usages を楯にとる。さて langue が実体としては存在せず、parole の積み重ねである以上、usages とは用例の多さを基準とすることである。数において利がないと悟って bon と形容詞を付しても、宮廷やご婦人方の bons usages を盾にとっても、実は bon と判断する観察者内部の不透明な基準の反映でしかなく、数の勢いには流されてしまうだろう。Fronde という語が funda というラテン語の語源にもかかわらず fronde で定着し、マレルブもそれには従っていたように。

文芸作品が時代を超えて読み継がれるかどうかは、一義的には作者の力量と作品自体の魅力によるが、最終的には読者の数が決めるだろう。魅力的な作品が時代の文脈を記憶させるのか、時代の文脈が記憶されたから作品も記憶されるのか。Car 書簡も *Comédies des Académistes* も時代の文脈を外れると揶揄の毒は感じにくくなる。文脈が忘れ去られた Muscardin は単なる言葉遊びとしか思えない。ただ Car 書簡は時代の文脈から外れて読んでも普遍的な魅力を十分に持っている。

(2003 年 9 月 22 日)

## 書誌

- Adam (Antoine), *Histoire de la littérature Française au XVII<sup>e</sup> Siècle*, 5 vols, Paris, del Duca, 1962
- Brunot et Bruneau, *Précis de grammaire historique de la langue française*, Paris, Masson, 1969.
- Balzac (Jean-Louis Guez de), *Œuvres*, publiées par Valentin Conrart. 2 vols, Genève, Slatkine, 1967, (Réimpression de l'édition de Paris, 1665.)
- Chapelain (Jean), *Lettre de Jean Chapelain de l'Académie française*, publiées par Ph. Tamizey de Larroque. correspondant de l'Institut et du Ministère de l'Instruction publique. tome premier, septembre 1632 - décembre 1640, Paris, Josephe Floch, 1968, (Réimpression de l'édition de Paris, 1880.)
- Génetiot (Alain), *Les genres lyriques mondains (1630-1660), Etude des poésies de Voiture, vion d'Alibray, Sarasin et Scarron*, Paris, Droz, 1990.
- Génetiot (Alain), *Poétique du loisir mondain, de Voiture à La Fontaine*, Paris, Honoré Champion, 1997.
- La Bruyère (Jean de), *Œuvres complètes*, Paris, Gallimard (Pléiade), 1988 (annoté par Julien Benda, 1935.)
- Magne (Emile), *Voiture et l'Hôtel de Rambouillet, les années de gloire (1635-1648)*, Paris, Emile-Paul Frères, 1930 (Nouvelle édition),
- Pellisson et D'Olivet, *Histoire de l'Académie Française, avec une introduction, des éclaircissements et des notes par M. Ch.-L. Livet*, tome 1, Genève-Paris, Slatkine, 1989, (Réimpression de l'édition de Paris, 1858.)
- Tallemant des Réaux (Gédéon), *Les Historiettes*, 2 vols. édition établie et annotée par Antoine Adam, Paris, Gallimard (Pléiade), 1980 (*Historiettes* と略記)
- Saint-Evremond (Charles de), *Comédie des Académistes*, reprise dans *Théâtre du XVII<sup>e</sup> siècle*, tome II, Paris, Gallimard (Pléiade), 1986 (annoté par Jacques Truchet)
- Vaugelas (Claude Favre de), *Remarques sur la Langue Française, utiles à ceux qui veulent bien parler et bien écrire*, Paris, Champ Libre, 1981.
- Voiture (Vincent) (éclaircissements et notes par M. A. Ubicini), *Œuvres de Voiture, Lettres et Poésies, nouvelle édition revue en partie sur le manuscrit de Conrart, corrigée et augmentée de lettres et pièces inédites, avec le Commentaire de Tallemant des Réaux, des éclaircissements et des notes par M. A. Ubicini*, 2 vols., Genève, Slatkine, 1967 (Réimpression de l'édition de Paris, 1855) (Ubicini と略記)
- Voiture (Vincent), *Poésies*, édition critique publiée par Henri Lafay, Paris, Librairie

Marcel Didier, 1971, 2 vols.

Wartburg (Walther von), *Evolution et Structure de la langue française*, Berne, Francke, 11e édition, 1988.

田島俊郎 「ジュリーへの手紙 -ヴォワチュールの反語-」、『徳島大学教養部紀要 (外国語・外国文学)』第2巻、1991年、183-204頁

田島俊郎 「ヴォワチュールが語る 1683年のイタリア」、『言語文化研究 徳島大学総合科学部』第9巻、2002年、87-116頁

田島俊郎 「ヴォワチュールをめぐる論争」、『フランス文学』(日本フランス語フランス文学会中国・四国支部)、No.24、2003年、14-25頁